

池田徹郎先生の霊に捧げる

弓 滋

私共が敬愛してやまない池田徹郎先生が去る10月2日早暁、忽然として逝かれた。水沢から逸早く訃報が齎された時、一瞬わが耳を疑った程である。それというのも昨年の4月、水沢を訪れた機会に老先生宅へ御機嫌伺いに参上した折には、多少お痩せになったかにはお見受けしたが、昔と少しも変わらない少々高目の元気なお声に接する事ができ、又辞去するに当っては態々門の外までお見送り頂き、その上御夫人に対して私と2人だけの記念写真を撮ってくれと強く所望された。陽光燦々とした中で写真を今更ながら取出し、拝見していると、亡くなられた事がまるで嘘のようである。

先生は広島高師から京都帝大の宇宙物理学科御卒業までずっと御一緒であり又大の親友でもあった故川崎俊一博士(緯度観測所第2代所長)と共に緯度観測所に赴任されたのが大正11年(1922)5月17日の事であり、昭和38年(1963)5月16日御退官になるまでの丸々41年間を緯度観測所一筋に過され、ここに一生を捧げられた。

昭和18年(1943)1月19日からは病気で早く世を去られた第2代所長川崎博士の跡をついで第3代目となられ、御退官までの20年とおよそ4月を所長という重責の地位におられた。この長さは初代所長木村栄博士の明治32年(1899)から昭和16年(1941)に至る42年には遠く及ばないものの、歴代所長の中では2番目に長い。

元来緯度観測所という国立研究所は、それが挙げてきた大きな実績とは裏腹に極めて小規模であり、従って予算規模も小さい。乏しい予算の中で昼夜を分たない不断の観測と研究をいかに効率的に推進してゆくかが歴代所長の頭の痛い所であったと考える。木村初代所長時代はいわば創業の時期から成熟期への道程であると分析する。又西洋文化の吸収消化に忙しかった時代に、いきなり国際社会に躍り出て文化先進諸国と渡り合わねばならなかった時代であり、成果を受けついただけの私共では、とても想像もつかない苦労があったと思う。一方池田先生御就任の時期は明治政府発足以後で最も軍国主義華やかな時であり、すでに長期化した日中事変と16年の暮に突入した太平洋戦争も激化するばかりで、一向に解決のめどがつかないばかりか、ややかげりがみえはじめ、国をあげて大変な時期であった。軍事目的とは何の因果関係もないと見られる緯度観測所が当時廃止の憂目を見なかったのが不思議な位である。あまりにも小さい小さい研究所である為に見落されて命拾いしたのかも知れな

い。こういう環境の中での運営は並大抵の事ではない。程なく終戦を迎え、国民は一様に困苦欠乏と混乱の渦に捲き込まれる事になる。このような不遇の中で総勢50名ながしの所員を掌握して、国際共同緯度観測を一日も中断することなく続行し同時に研究の活性化を指導された池田所長の功績は極めて高い。

極運動の研究にとって、緯度変化の観測研究と相俟って車の両輪をなす経度変化の観測研究の推進もこの頃に始まり、バンベルヒ子午儀による時刻観測から発足した。その後、PZTやアストロラープの導入が図られ、一方ではリーフラー振子時計に代る水晶時計、原子時計の設置へと日進月歩の拡充強化がなされた。この頃にかけての先生の御活動ぶりは、身近かでお手伝いをしていた私自身がよく知っている。

又先生は若い頃から長年にわたって気象観測課を指揮しておられ、所長就任後も特に観測室周辺及び近傍上層を含む局地的気象要素の変動が、観測される経緯度値に影響を与える所小なるものではないとの考えから、この方面の研究育成には特に配慮されていたようである。その意を体して、測風気球による上層気流の観測、繫留気球による上層気象要素の測定とか、観測室周辺の微少温度差の検出、風向風速の微妙な変化の観測等が次々と計画実行され、今日のいわゆる微気象観測システムの基盤が作られた。

このように先生には運営上の御苦心ばかり多く、その為御自身としての論述はあまり多くない。これを以て先生は不勉強であると批判する者があるとすれば、それは誤まっている。先生は御自分の研究の時間を割いても運営に万全を期され、そのおかげで多くの後継者が時節柄十分とまではゆかなくとも、まずまずの状況下で研究に精励する事ができ、数多くのすぐれた成果を挙げる事ができている。

先生の論文を代表するものは何と云っても“水沢に於ける上層気流の統計的研究並に其緯度変化に及ぼす影響”(緯度観測所彙報第1号, 1954, pp. 1~132)であろう。これは“水沢に於ける上層気流の統計的研究”と“水沢に於ける上層気流の緯度変化に及ぼす影響”の2部からなっており、 α 項を解明しようとする努力が見られる。

前段では地上、高度500m及び1,000mの風を以て上層風の特徴を表現させるのが最も妥当であるとしてい

る。又この研究では風速は考えないで、風向だけを対象としている点が、あるいは突込み方が不足しているという批判を受けるかも知れない。

後段では各高さにおける風向と緯度観測値とを丹念に照合した結果、風による緯度の年変化に対し、地上風は殆ど関与せず、又 1,000 m 風は常数部には大きく働くが周期変化にはあまり関与しないのに反して、500 m 風向のみが緯度の周期変化に決定的影響を持っている事が判ったとしている。又 Z 項への影響については、北半球の夏期に極大、冬期極小を与えるという定性的な面ではほぼ一致しているとはいふものの、定量的には十分な説明がつけられていない。後年、水沢の若生博士他によって、Z 項は半年周章動項の係数の不備によってかなりの部分が説明つけられているものを見ても、風によって Z 項の全部を説明できなかつたとしても不思議ではない。半年周章動項の不備で以てしても説明がつかない部

分こそ、風の影響として説明がつくかも知れない。

老先生は若い頃から後進育てに特殊な才能を具えておられたらしい。若い所員が新たに入ってくると、物理学とか数学を基礎から叩きこまれた。この薫育を基にして更に上級の学校をめざし、あるいは検定試験を受験して世に出る為に緯度観測所を巢立って行った人の数も多い。

私は昭和 24 年早春に水沢に赴任し、以来今日まで老先生のお世話になった最たる者であるが、若い頃には血気にまかせて先生を困らせたり、悲しませたりして、今になってみると誠に申訳ない次第であったと思っている。私の我儘もじっと辛抱して下さった先生とのお別れは非常に悲しい。然し先生のかつての部下であり直弟子でもあった上述の方々はもっと悲しい思いに駆られておられる事と思う。これらの方々ならびに同学の皆様と共に心から池田先生の御冥福をお祈りしたい。

池田徹郎氏略歴

池田徹郎 (享年 87 歳)

明治 27 年 5 月 20 日生

明治 27 年 5 月 20 日 島根県簸川郡斐川町大字出西で出生
 明治 38 年 3 月 28 日 島根県簸川郡直江村阿宮尋常小学校卒業
 明治 41 年 3 月 25 日 " 外 5ヶ村組合立直江高等小学校卒業
 明治 41 年 4 月 1 日 島根県立杵築中学校第二学年編入学
 大正 2 年 3 月 25 日 同校卒業
 大正 6 年 3 月 25 日 広島高等師範学校数物化学部卒業
 大正 6 年 3 月 31 日 和歌山県立海草中学校教諭
 大正 11 年 3 月 25 日 京都帝国大理学部物理学科卒業
 大正 11 年 5 月 17 日 緯度観測所技師
 大正 11 年 5 月 23 日 気象課長
 昭和 18 年 1 月 19 日 緯度観測所長事務取扱
 昭和 19 年 7 月 8 日 学術研究会議天文学研究委員会委員
 昭和 22 年 1 月 10 日 測地学委員会委員
 昭和 22 年 8 月 11 日 学術研究会議地震予知研究連絡委員会委員
 昭和 22 年 10 月 4 日 緯度観測所長

昭和 24 年 国際ユネスコ会員
 昭和 25 年 11 月 3 日 岩手日報文化賞受賞
 昭和 27 年 12 月 22 日 理学博士
 昭和 37 年 1 月 6 日 国際極運動観測中央局を緯度観測所に誘致
 昭和 37 年 3 月 9 日 国際極運動観測事業中央局事務取扱
 昭和 38 年 5 月 16 日 緯度観測所退職
 昭和 38 年 6 月 21 日 水沢市名誉市民
 昭和 38 年 7 月 3 日 } 岩手県公安委員会委員
 昭和 40 年 7 月 25 日 }
 昭和 38 年 9 月 10 日 修紅短期大学非常勤講師
 昭和 39 年 5 月 14 日 日本天文学会名誉会員
 昭和 39 年 7 月 } 岩手放送審査員
 昭和 46 年 6 月 }
 昭和 40 年 4 月 1 日 } 修紅短期大学教授
 昭和 47 年 3 月 31 日 }
 昭和 40 年 7 月 26 日 } 岩手県公安委員会委員長
 昭和 47 年 7 月 2 日 }
 昭和 42 年 4 月 29 日 勲二等瑞宝章受章
 昭和 43 年 1 月 17 日 河北新報文化賞受賞
 昭和 46 年 4 月 1 日 } 東北測量専門学校初代校長
 昭和 50 年 3 月 31 日 }
 昭和 47 年 4 月 1 日 修紅短期大学名誉教授
 昭和 50 年 4 月 1 日 東北測量専門学校名誉校長
 昭和 51 年 1 月 5 日 緯度観測所名誉所員